―法興寺遺跡出土資料をめぐって――

じめに

は

文の施された陶片の約九○パーセントが植物文を主文とするものであった。このときの調査で表面採集された陶片数は千点を越えるものではな(゚゚゚) と大きく異なるものではない。定窯白磁の植物文の中で圧倒的多数を占めるのが蓮花文である。定窯白磁の蓮花文については、以前、分類と製 かったし、小さい陶片では器全体の文様を知ることができない。しかし、これまでに管見した伝世品や図版類から得た印象は小山氏の調査結果(2) るが、この時期の定窯白磁の文様の大多数が植物文であった。一九四一年に定窯窯址を発見した小山富士夫氏の調査結果によると、劃花・印花 めて来たのは、 河北省曲陽県北部の澗磁村とその周辺に窯址の広がる定窯は宋代を代表する白磁窯として知られる。定窯白磁の製品の中で研究者の関心を集 劃花・印花などの技法によって文様が施された製品である。北宋中期から金代にかけてが定窯の最盛期であったと考えられてい

る文様であるために、龍文のある白磁は他の動物文の白磁より注目されてきたようである。この小論では、この新資料の出土が報告されたこと を機会に、龍文の施された定窯白磁の分類を試み、これらの定窯白磁に関するこれまでの知見を整理してみたい。 近年、定窯窯址に近い寺院遺跡から少しまとまった数の龍文のある白磁が出土した。龍文は、特に近世の中国では、 皇帝との関連を想起させ

作年代に関する初歩的な考察を試みたことがある。(4)

定窯白磁の龍文について

東 徹 夫

伊

— 85 **—**

窯の製品であることにほぼまちがいないと述べている。 窯窯址から出土した資料と完全に一致すること、「覆焼法」と呼ばれる焼成技法を採用していること、「涙痕」と呼ばれる釉薬の流痕があること 十三点の白磁について簡単な報告を行っている。この報告の著者である妙濟浩・薛増福の両氏は、これらの白磁の胎土・釉薬・文様の特徴が定(5) (「覆焼法」・「涙痕」とも定窯白磁にしばしば見られる特徴である)、出土地点が定窯窯址の東側にあることから、これらの白磁が北宋時代の定 一九八一年五月、河北省曲陽県南鎮公社北鎮村にある法興寺遺跡で穴蔵が発見された。『文物』一九八四年第五期は、この穴蔵から出土した

地元の研究者である両氏の鑑定を尊重せざるを得ない。なお、製作時期については、後で検討することになろう。 磁村の定窯窯址からわずかに一キロメートル程しか離れていないことから、定窯と考えてよいと思われる。胎・釉薬については、 これらの資料を実見する機会に恵まれていないが、製作地については、文様・器形が確かに定窯白磁の特徴を備えていること、 出土地点が澗 現時点では、

さて、十三点の出土白磁の内容は次のとおりである。

(a)
劃花龍文盤
1
六

劃花龍文碗(図2)

一点

(b)

印花雲龍文盤(図3) 三点

(c)

(d) 印花雲龍文鉢(図4)

一点

二点

前記の報告の記すこれらの白磁の特徴をまとめると次のようになる。

あり、 (a) ゆったりと低く立ち上がった盤で、造りはやや厚い。口縁は唇口に作られている。胎の質は堅く、色は白い。釉薬の質は潤いと穏やかさが(19) 光沢がある。釉色はわずかに黄色味を帯びた白である。口縁部は釉薬が剝がされて、 いわゆる芒口になっている。



図2 劃花龍文碗(法與寺遺跡出土)



図1 劃花龍文盤(法興寺遺跡出土)

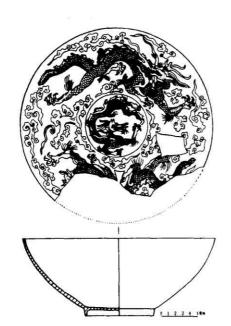


図4 印花雲龍文鉢(法興寺遺跡出土)

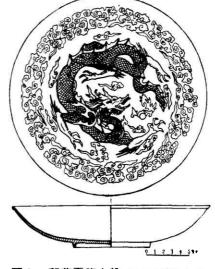


図3 印花雲龍文盤(法興寺遺跡出土)

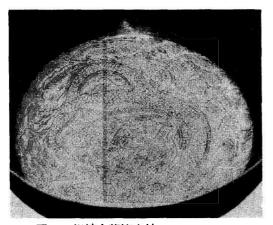


図6 銀鍍金龍濤文鉢(遼駙馬墓出土)



図 5 陶範「甲辰正月望日造」銘

内面には、 右回りに旋回する団龍形の龍 一頭が、大きく劃花の技法であらわされている。 龍の顔の前には宝珠一顆が置かれている。 龍は三爪

である。

これら六点は、 だいたい同寸法で、 器形と釉色は全く同じであるが、 胎がより細白でより堅いものもある。うち三点は、 龍の下方に二つの流

雲文が置かれているそうである。

うち一点の寸法は口径三○・四センチメートル、高五・九センチメートルである。

(b) 側面が垂直に立ち上がった深めの碗である。 造りは薄い。 胎の質は堅く緻密で、 磁化の程度が非常に高い。 胎の色は白い。 釉薬の質は均一

・細潤で光沢がある。釉色はほんのわずか黄色を帯びる。芒口になっている。

外側面には左に進むいわゆる行龍一 一頭が劃花であらわされている。龍は三爪である。

口径 一〇・四センチメートル、高八・五センチメートル。

(c) ゆったりと低く立ち上がった盤で、 口縁部は唇口になっている。 造りは薄い。 胎は純白で堅く細かい。 磁化の程度は非常に高い。 釉薬の質

は細潤・透明で、光沢が非常に強い。釉色はほんのわずか黄色を帯びる。芒口になっている。

の間の余白には八個の流雲文が置かれている。龍は四爪である。以上の文様が印花の技法であらわされている。 内面中央には左回りに旋回する団龍一頭があらわされ、その周辺を流雲文帯が囲む。 龍の顔の前には火焰宝珠 一顆が置かれ、 龍文と流雲文帯

三点とも、 寸法がほぼ等しく、その他の特徴は同じである。

うち一点の寸法は口径二三・二センチメートル、高五センチメートルである。

(d) ややすぼまり気味に開く鉢で、造りは薄い。 胎の質は細かく、 緻密で堅い。色は白い。 釉薬の質は潤いがあり、 きめ細かく、 光沢がある。

釉色はほんのわずか黄色をおびた白である。芒口になっている。

内面の円形の底部には旋回する団龍一頭を置き、内側面に右回りに二頭の行龍を旋回させている。 内側面の余白には流雲文を配する。龍は五

爪である。 以上の文様が印花の技法であらわされている。

これら二点は、

高台の寸法が一センチメートル異なるが、その他の点は完全に同じである。

うち一点の寸法は口径二六・四センチメートル、高十センチメートルである。

(e) 無文の盤である。特徴については省略する。

なっている。爪の数も、 わないか、伴っても僅かである。また、自劃花龍文盤の龍と、同印花雲龍文盤の龍・回印花雲龍文盤の内底部の龍とでは龍の旋回の方向が逆に これらの法興寺遺跡出土の白磁に描かれた龍は、劃花と印花と比べると、印花の方が鱗や鰭などの描写が緻密である。 劃花のものは三爪だが、 印花のものでは四爪か五爪にあらわされている。 劃花は流雲文を全く伴

度型を作っておけば比較的容易に短時間で同形・同文様の製品を作りうる印花という、施文技法の相違で説明できることが多いのではないだ このように、いくつかの相違点は見出されるものの、それらの相違点の多くは、一点一点陶工の手によって彫られなければならない劃花と、

ろうか。

猛猛しく威厳がある。胴と四肢の鱗も克明に描かれ、 は関節がはっきりしており、空をつかむ爪は鋭い爪先まで丁寧に描かれる。頭には二本の角があり、 むしろ、これらの龍は、 その類似点に注目すべきであると考えられる。 **鬣・**鬚・肘毛なども省略されていない。 胴は抑揚をもってくねり、 口を開き、 鰭・四肢・尾は明確にあらわされる。 両眼は険しく前を睨み、 表情は 四肢

るという特徴ある姿態を共通して見せている。 らせかたや肢の構えがよく似ている。 (a) 劃花龍文盤とC) 印花雲龍文盤の龍は、 また、〇印花雲龍文鉢の内底部の龍とあわせて、これら三種の団龍は、 回転方向こそ違うものの、 前者の後肢の一本の下半分が胴に隠れて見えないほかは、 尾と伸ばした後肢が輪状に交差す 胴のくね

_

法興寺遺跡出土の四種類の龍文器のうち、 (a) 劃花龍文盤と©印花雲龍文盤については、 同形・同文様の資料が伝世品に見出されるので、 次に

「a」劃花龍文盤」と同形・同文様の資料

紹介する。

① 日 本

②ロンドン デヴィッド財団蔵(12)

国立故宮博物院蔵(13)

③ 台 北

④ストックホルム 東アジア博物館蔵(4)

(口径二九・八センチメートル)

(口径二九・二センチメートル)

(口径三〇・七センチメートル)

(口径三〇・〇センチメートル)

るものについてみると、高さは○・七センチメートル、底径は二・三センチメートルの差があり、個体差が大きい。 これらを含めて五点の劃花龍文盤の寸法を見ると、口径は一センチメートルの差の中にあり、あまり違わない。口径以外の寸法のわかってい

白磁としてはやや暗い。龍文は、基本的な姿態は倒と同じであるが、鬣・鬚・肘毛は房になっている。頭部はやや不鮮明に上がっている。 ①は実見したことがあるが、口造りなど器形の特徴が法興寺遺跡出土盤個によく似ている。造りはやはり少し厚い。釉薬は光沢があり、

② は、 図版解説では、定窯白磁としては特に精好な胎と釉薬のものではないことしかわからない。龍文は①に酷似している。

る。龍文は、基本的な姿態はほと同じである。宝珠は描かれていないように見える。 ③は、 図版で見ると器形の特徴が何と①に似ている。図版解説によれば、造りはきわめて厚く重い。釉色はやや黄色を帯びている よう で

④は、図版で見ると、龍の基本的な姿態はほによく似ている。渦巻き様の火焰宝珠がくっきりと彫り出されている。

これら完形品のほか、中国の調査によって定窯窯址から劃花龍文盤の破片二点が採集されているので次に紹介する。

⑤一九五七年出土の破片(長寸一四・五センチメートル)(15)

述のいずれの劃花龍文盤もこの破片に及ばない。 から胴の前三分の一ほどが見える。胎と釉薬は標準的な定窯白磁のそれであった。造りが厚いという印象は受けなかった。 この破片は実見したことがあるが、この大きさと形状からして、回などとほぼ同形・同寸の盤の破片と考えるのが自然であろう。龍は後頭部 彫りが極めて精緻であったことである。精緻・丁寧という点では、定窯白磁の劃花でこれ以上の資料を見たことがない。この点では、 最も印象的であった 前

⑥一九五九年出土の破片

この破片は図版でしか見ておらず、寸法その他の特徴はわからない。 龍の頭部から胸あたりまでが残っているが、図版で見る限りでは、 彫り

はかなり精緻・丁寧であるように思われる。

「〇印花雲龍文盤」と同形・同文様の資料

中国佳酸鹽学会編『中国陶瓷史』によれば、(のと同工の盤十点が、一九四八年にやはり法興寺遺跡から出土している。十点のうち六点は中国(28)

国外へ流出し、残りの四点が北京の故宮博物院と上海博物館に収蔵されている。

(口径二三・二センチメートル、高四・八センチメートル)

⑦上海博物館蔵

⑧北京 故宮博物院蔵

⑨米国 個人蔵

⑦は図版で紹介されているし、展示中に実見したこともある。口径は⑸と同寸であるし、器高も○・二センチメートルしか違わない。 器形は

ほぼ同じである。文様のうち龍は心に酷似する。釉薬は明るいほうである。口縁に銅の覆輪を被せてある。

⑧は展示中に実見したことがある。器形・釉調は⑦に似ており、文様に至っては⑦とほぼ完全に一致する。

⑨は、図版で見ると、文様が⑦とほぼ完全に一致する。(20)

⑦・⑧・⑨については、同じ型から作られた可能性がある。にもその可能性を捨てきれない。

前掲の『中国陶瓷史』は、国外に流出した印花雲龍文盤六点のうちの一点の底部に、「尚食局」という三字の銘が刻まれていると記している。(②)

⑨がその銘をもった盤なのかどうかは、まだ確認ができていない。

=

このように、法興寺遺跡出土の定窯白磁の資料のうち、 「a」劃花龍文盤」と「の印花雲龍文盤」については、 それぞれいくつかの類似した資

料があることがわかった。次に、これら二種類の盤の製作年代について検討してみる。

(1)「a)劃花龍文盤」の製作年代

企業自磁の龍文について

この種の劃花龍文盤については、紀年銘をもつ資料も、年代の明らかな遺跡からの出土例もない。

前掲の法興寺遺跡出土資料の報告者妙濟浩・薜増福の両氏は、回の盤について、造りがやや厚いこと、口縁が唇口になっていること、涙痕が さらに胎質・釉色・文様・製作技法などは、明らかに北宋の前期か中期の特徴を示すと述べている。

れる馮先銘氏は、その著書『定窯』で、北宋中期にはまだ覆焼法がなかったとの見解を述べておられる。(3) につくられた北宋前・中期の資料は発見されておらず、覆焼法は北宋後期に始まると考えられている。定窯窯址の調査に早くから携わっておら 製作技法に関しては、第一節で記したように、この盤の口縁は芒口に作られている。定窯の製品に関する現時点での知見では、

いるのであり、この場合年代決定のための決め手にはならない。 唇口については、 「の印花雲龍文盤」も唇口に作られているが、 妙濟浩・薛増福の両氏は、 同じ報告文の中でこの盤を北宋後期の製品として

涙痕にしても、北宋前期から金代までの定窯白磁に見られる特徴であり、北宋前・中期の製品の特徴と限定することはできない。

この盤の胎質・釉色などに関する両氏の見解は尊重すべきであるが、現時点では北宋後期以降の製品と考えるべきであろう。製作年代の下限

②「c)印花雲龍文盤」の製作年代

については、「〇印花雲龍文盤」とからめて後に考察することにする。

判定しておられるが、その根拠を明確に示しておられるわけではない。 ⑦・⑧をふくむ一九四八年出土の印花雲龍文盤十点を北宋の宮廷専用の器であると判断している。馮先銘氏は、これらの盤を北宋後期の製品と この盤と同工の盤の中に、「尚食局」の刻銘をもったものがあることは前節で述べた。 前掲書『中国陶瓷史』 は この銘の存在を根拠として、

省文化局文物工作隊による発掘調査によって発見された。これらの資料は陳万里氏や馮先銘氏によって検討された。その結果、馮先銘氏は前掲省文化局文物工作隊による発掘調査によって発見された。これらの資料は陳万里氏や馮先銘氏によって検討された。その結果、馮先銘氏は前掲 の著書『定窯』の中で、総合的見解として、尚食局は宋代の宣徽院の下に置かれた六つの局のひとつであると述べておられる。おそらく、 「尚食局」銘の陶片が澗磁村の定窯窯址の北宋の層とされる層から出土したことからこのような見解を出されたものと考えられる。 しかし、「尚食局」は金代にも置かれていたのであるから、「尚食局」銘を年代判定に採用するためには、宋・金代の職官制のより精密な研究(38) 「尚食局」という銘をもった白磁片は、故宮博物院が一九五七年におこなった定窯窯址の調査と、一九六○年から一九六二年にかけての河北

らかな印花の資料は極めて少なく、また金代後半に偏っている。それらをもとに検討しても余り意味がないと思われる。 るか論じることができるようになるかもしれない。それでは、この盤の技法や文様から製作年代を判定することができるかというと、年代の明 が必要であると思われる。また、「尚食局」銘の字体も一種類ではない。 この種の在銘の資料がもう少し増加すれば、字体と作行がどう関連す

ので、北宋から金にかけてという、はなはだあいまいな製作年代しか与えることができないのである。 「回劃花龍文盤」も「60印花雲龍文盤」も、 芒口となっていることから北宋中期以前に遡ることはなく、 元代ものほど作が悪くはない

四

る。 の分類は現在でも妥当と思われるので、定窯の龍文をこの分類に従って三分し、前節までに紹介した資料以外の定窯の龍文資料を次に挙げてみ スウェーデンのヤン・ウィルギン氏は、宋代陶磁の文様に見られる龍を、「龍」・「螭」・「魚龍」 の三形式に分類された。名称は別にして、こ

(1)「龍」形式のもの

龍」とは前節でとりあげた龍のことである。この形式の龍を加飾技法によって三分した。

(A) 肉彫りによるもの

えられる。 で見える範囲では、龍は二本の角を持ち、胴はもちろん顔にまで鱗が生えている。三肢が見え、三爪が鋭い。器形から見て北宋中期の製品と考 「蟠龍高脚香炉」(ストックホルム東アジア博物館蔵)は、鍔口に作られた脚付きの香炉である。 脚に一頭の龍が体を巻き付けている。 図版

のもある。頭部だけでは判断できないので、参考までに挙げておく。これらの浄瓶は十世紀後半の定窯白磁の基準作と見なされている。(34) れらは浄瓶の胴部肩の注口を龍頭形に作ったもので、二眼・二角・二耳を持ち、上顎の長い口を大きく開ける。口内には舌があり、牙を持つも 近年、河北省定県の静志寺と浄衆院の塔基から、相当数の定窯の製品が出土した。その中に「龍口浄瓶」が少なくとも二点含まれていた。と(33)(33)

(B) 刻花・劃花によるもの

である。三爪にあらわされている。

された「刻花龍文盤片」は、盤の内面中央部に右回りに旋回する団龍を彫ったもので、頭が後方を振り返っているのが姿態における主な相違点 盤・鉢の類では、定窯窯址出土の陶片が他にもあり、図版等で紹介されている。⑤の破片とともに『近年発見の窯址出土中国陶磁展』に出品

は、一九八三年に開催された『定窯白磁』展と同名の展覧会図録において公にされた。それによると、これらの陶片には五点の「劃花龍文片」(55) つで、残り一点は不明とされている。この中の盤は高台内側に「龍」一字が釉下に刻まれているのが注目される。(38) が含まれている。いずれも鱗のある胴の一部が見えており、「龍」形式の龍であることはまちがいないであろう。 器形は盤・鉢・壺が各一点ず 小山富士夫氏は定窯窯址で採集された陶片を日本に持ち帰られたが、その大部分は中国陶磁史研究会によって精密に再調査された。その結果

種のものである可能性がある。もう一点は、鬚と鱗の生えた前肢が見えており、「龍」形式の龍であることがわかる。(如) 央部に、三爪となった肢先・鱗のある尾・火焰宝珠が彫られている。これらの配置から、この龍文は、a「劃花龍文盤」とその類品の龍文と同(39) 小山氏が持ち帰られた定窯窯址出土陶片の一部は出光美術館にも所蔵されている。うち二点が白磁「劃花龍文盤片」である。一片は、 内面中

同じように精緻な「龍」形式の龍文が彫られていた。 九八四年に、定窯窯址に近い定県博物館を見学した際、窯址出土の白磁「劃花龍文盤片」数点が陳列されているのを見た。うち一片は⑤と

定窯窯址からは白磁以外の陶片も出土している。それらの中に「緑釉劃花龍文盤片」があり、一九五七年に澗磁村窯址で発見された。(a)(fi)

(C) 印花によるもの

花龍文盤」と同種の龍文の可能性がある。

龍」形式であり、の「印花雲龍文盤」の雲龍文の同類である。 前述の河北省文化局文物工作隊が実施した定窯窯址の発掘調査によって出土した陶片のなかに、白磁「印花雲龍文盤」が含まれている。(タヒ) 五爪か四爪かどちらかであるが、図版では判然としない。

(2)「螭」形式のもの

螭は螭龍とも呼ばれる。(43) 細長い胴と尾には明瞭な背鰭が無く、鱗も無い。斑文を持ったものはある。四肢の先は瘤のような三爪にあらわされ

たり、爪が分かれず「の」の字形に略されたりする。頭部は正面から三角形に描いたものも多い。角は有ったり無かったりである。表情は小児

ウィルギン氏の分類を参考にしてこの形式の龍を分類し、簡単に紹介する。(サイ)

のようで、威厳とか猛猛しさは全く感じられない。

(A) 劃花によるもの

頭の螭龍が右回りの団龍となっているもの。頭は正面観であらわされる。この文様だけが鉢などの内面中央に置かれたものと、その周りを頭の螭龍が右回りの団龍となっているもの。頭は正面観であらわされる。この文様だけが鉢などの内面中央に置かれたものと、その周りを(5)

蓮唐草文が取り巻いたものがある。(46)

草文が取り巻いている。(47) 左回りの団龍となった螭龍。側面観であらわされた頭部は後方を振り返っている。鉢や盤の内面中央に置かれ、その周りを牡丹唐草文や蓮唐

細かい。これらの螭龍は胴や四肢のあちこちから蔓が出ており、螭龍と唐草文が混然と一体になっている。 以上の螭龍は比較的簡略に描かれており、爪も分かれていない。以下の螭龍は比較的大きくあらわされるせいか、描写もこれまでのものより

右回りの団龍となり、 頭が正面観であらわされた螭龍一頭だけがあらわされたものと、その周りを雷文などの帯がかこむものが盤や鉢に(48) あ

わされている。

一頭の螭龍が、一

る。

二頭の螭龍が左回転で旋回し、口縁を唐草文が巡る盤がある。龍の頭はいずれも正面観であらわされる。

頭は右旋回の団龍形に、もう一頭は後方を振り返る姿で描かれた盤がある。(50)

前者の頭は側面観で、

後者の頭は正面観であら

を巡らした碗もある。 の螭龍は逆方向に旋回する。頭は、 内面中央に前述の比較的簡略に描かれた螭龍の団龍や花文を置き、その周りを二頭の大きな螭龍が行龍形にあらわされた盤や鉢がある。 ⁽⁵²⁾ 一頭は側面観で、もう一頭は正面観であらわされている。外面にも二頭の螭龍を配し、口縁の内外に雷文帯 二頭

低い筒形の香炉の外面に、 一頭の行龍形の螭龍を彫り、その上下に雷文帯を巡らしたものがある。(3) 頭は側面観であらわされる。

(B) 印花のもの

を金の大定二十四年(一一八四)のものとしておられる。(56) 様構成を見せる陶範が馮先銘氏によって紹介されている(図5)。 この陶範には「甲辰正月望日造」という銘が彫られており、 広い内底に、石榴花唐草文上で右向きに旋回する団龍形の螭龍をあらわした盤がある。内側面に唐草文帯と雷文帯が巡る。これによく似た文広い内底に、石榴花唐草文上で右向きに旋回する団龍形の螭龍をあらわした盤がある。 内側面に唐草文帯と雷文帯が巡る。これによく似た文 馮先銘氏はこれ

草文帯が巡る。二頭の螭龍は、同施向に旋回するものと逆方向に旋回するものがある。内側面の唐草文帯の代わりに四頭の螭龍を巡らしたもの(57) 広い内底に、唐草文と一体になった二頭の螭龍をあらわした盤がある。内底の端は雷文帯が巡り、内側面には雷文帯と幅広の蓮唐草などの唐

内底部に右に旋回する団龍形の螭龍を置き、その周りを牡丹唐草文が囲む鉢がある。口縁の内側には雷文帯が巡る。内底部に右に旋回する団龍形の螭龍を置き、その周りを牡丹唐草文が囲む鉢がある。口縁の内側には雷文帯が巡る。

号をもった陶範に見られることから、この文様構成の資料は金代という年代が与えられてきた。しかし、この種の資料の製作年代が北宋まで上(61) がる可能性もあり、今後の紀年資料の増加とその検討が期待される。 螭龍文の施された資料には、細い雷文帯や唐草文帯で器面を同心円状に区切るという構成をとるものが多い。このような文様構成が金代の年

(3)「魚龍」形式のもの

厳のある頭が付く。(2) 「龍」・「螭龍」に比べて太い胴をもち、四肢が無い代わりに二枚の翼が有る異形の龍である。背鰭・尾鰭・鱗が有る魚体に、「龍」 に似た威

·違いに置かれ、内側面に雷文帯と広い唐草文帯が巡るものがある。内底面の余白は唐草文が埋める。(G) 印花のものしか見たことがない。印花螭龍文盤によく見られた器形・文様構成の盤で、盤の広い内底面に、雷文帯に囲まれた二頭の魚龍が互

いに置かれ、その周りを花唐草文が囲み、その外の口縁下部を細い流雲文帯が囲む。高台の内側に「尚食局」の三字の銘が刻まれているのが注 定窯窯址の北宋とされる層から、 (a)やにに似た形の盤で魚龍文のほどこされたものが出土している。内面中央部に胴の太い魚龍が二頭互い違(b)

定窯窯址から出土した魚龍文の白磁片はもう一点紹介されている。(65)

ィルギン氏は、このような魚龍は唐末・五代と明代に見られると述べておられる。定窯で言えば、北宋中期から金代という時期よりも限定(66)

五.

中野徹氏は、古代から近世にかけての工芸品における龍文の変遷を、天命を告げる使者としての生き物から、 天子の権威を象徴する瑞獣への

変化と捉えておられる。

見ると、尾と後ろに伸ばした肢とが輪状に交差するという特徴をはじめとして、定窯の団龍形の「龍」に見られる特徴的な姿態がすでに唐代に 基本的に成立していることがわかる。また、余白を流雲文が埋める構成(雲龍文)も唐代に成立しているのである。 より格が上の神獣としてあらわされるようになった。龍は当時の工芸品では、銅鏡の鏡背や銀器に団龍形であらわされることが多い。それらを 氏の研究によれば、ここまで「龍」形式の龍として述べてきた龍の形態は、漢代にはすでに基本的に成立していた。唐代になると、 他の瑞獣

なった。この時代、龍は宝珠を護持する形をとっている。龍が宝珠を追う形をとるのは宋代に入ってからのことになる。 方、矢部良明氏の研究によると、中国における仏教美術の発展の中で、六朝時代から唐にかけて龍と宝珠とが組合せてあらわされるようにほど

ところで、隋・唐の陶磁においては、龍は博山炉の脚部や瓶の類に巻き付く蟠龍として用いられたり、龍耳瓶の耳として首だけが用いられる(8)

など、白磁や青磁で肉彫りであらわされていた。(70)

る。 頭の「頭」が囲む。 州窯の龍文の資料である。 しかし、五代になると、越州窯の青磁において、龍は劃花でもあらわされるようになる。メトロポリタン美術館蔵の龍濤文鉢が最も有名な越 余白は波濤文で埋められている。 このような「龍」のほか、 越州窯では「魚龍」形の龍が波間に見え隠れする龍濤文も あ この鉢においては、内底中央に左回りに旋回する団龍形の「龍」一頭が置かれ、その周りを左回りに進む行龍形の二

に没した駙馬墓からの出土品の中に銀鍍金龍濤文鉢(図6)があった。内底部には、唐の鏡背や銀器に見られた団龍の伝統を引く形態の龍一頭が(3) ところで、 唐代に流行した雲龍文に代って、 五代に入ると龍濤文が流行したことは、 陶磁以外の工芸でも覗える。 遼の応暦九年 (九五九年)

において龍水図の爆発的な流行があったことを、矢部氏は明らかにされている。 る。この他にも、この時期に作られた龍濤文の銀器の作例は知られている。この時期の工芸において龍濤文が流行した背景として、五代の絵画 毛彫りで施されている。尾と後ろに伸ばした後肢とは輪状に交差する。余白は波濤文が埋めている。龍が宝晦を追っているのが新しい要素であ

れている。これは、 また、天福七年(九四二年)埋葬の呉越王銭元瓘の墓から出土した越州窯青磁四耳壺は、一顆の宝珠を奪いあう二頭の「龍」が浮彫りで施さまた、天福七年(九四二年)埋葬の呉越王銭元瓘の墓から出土した越州窯青磁四耳壺は、一顆の宝珠を奪いあう二頭の「龍」が浮彫りで施さ 中国陶磁における珠取龍あるいは戯珠龍の最も早い例の一つということになろう。

さて、宋代に入ると、いくつかの窯で龍文の施された製品が作られている。

であったと報告されている。このほか、耀州窯とされる北宋青磁の瓶で、頸部の周りに二頭の「龍」が肉彫りであらわされたものがある。(マト) 広安門外で一九五三年に出土した三百点余の青磁片があり、その胎と釉の特徴から耀州窯の製品と判定されている。そのほとんどが「龍鳳文」 陜西省の耀州窯では、北宋中期とされる層から、右に旋回する団龍形の「龍」が印花で施された青磁片が出土している。それより早く、北京(で)

龍が巻き付いている。爪は五爪である。これら二点の瓶は、器形と装飾技法から北宋後期の製品と考えられている。 を増している。 が二つに分かれている。口を大きく開いた顔は猛々しく威厳に満ちている。前肢の鋭い三爪は大きく描かれ、尖った背鰭とともにこの龍の迫力 た広い空間に一頭の龍が行龍形にあらわされている。形態は特異で、胴の後半に後肢が無い代りに腹部に鰭状のものが一枚付いている。尾は先 磁州窯系の製品においては龍文の施されたものは極めて稀である。白鶴美術館所蔵の白地黒搔落し龍文梅瓶は、肩と裾の捻花弁文にはさまれ破州窯系の製品においては龍文の施されたものは極めて稀である。白鶴美術館所蔵の白地黒搔落し龍文梅瓶は、肩と裾の捻花弁文にはさまれ 白地黒搔落し龍文瓶はネルソン美術館にも一点ある。大型の尊形瓶で、裾に蓮弁文があるが、その上部の空間いっぱいに一頭(だ)

れている。 埋められた劃花の鉢もある。「魚龍」は陶枕に見られる。枕面に唐子遊戯図が劃花で、側面には猛々しい顔をした「魚龍」が浮彫りであらわさ に崩れた花文のような文様があり、それを左に旋回する「螭」が囲む劃花の鉢がある。また、二頭の「螭」が頭をつきあわせ、 青白磁では、「龍」は日月壺と呼ばれる細高い瓶の頸部に巻き付いたものが知られるだけである。「螭」はもう少し多くの例がある。

南方の白磁とされるものの中に「魚龍」形の燈がある。顔は猛々しく二肢は四爪に作られている。(8) 広東省の潮州筆架山窯址から出土した青白磁片の中に「魚龍」が劃花龍濤文としてあらわされた盤の破片があった。 (8)

浙江省の龍泉窯では、頸部に「龍」を巻き付けた瓶が南宋時代に作られている。(85)

福建省の泉州窯では、 四爪の「龍」が印花であらわされた素焼の瓶の破片と、印花で「龍」があらわされた褐釉の破片が出土している。(8)

六

た。 らわされているのは定窯だけであること、また、定窯における「龍」・「螭」の文様構成の変形は他窯に比べて豊かであることを知ることができ 前節で唐から宋にかけての龍文の展開と、宋代における定窯以外の窯の製品とを概観した結果、宋代の龍の三形式の総てが劃花なり印花であ

かになった。この点においては、定窯は唐代の伝統を復活しているのである。 また、 定窯は、 龍濤文をもたないという点で、五代から宋にかけての陶磁における龍文の流れの中で、際立った特徴をもっていることも明ら

花であらわされたものとの総てか一部が貢磁であったと考えるべきであろう。 ての龍文器を作っていたことと、この点に関して定窯は施文器を生産した他の窯にはない権威を与えられていたことを示しているといえよう。 もっとも、定窯の龍文器の総てが貢磁であったわけではなかろう。「尚食局」の 銘が彫られた例のあるに印花雲龍文盤の類品と「魚龍」が印 また、「尚食局」などの銘が刻まれている龍文器は、今のところ定窯以外では見出されないことも明らかになった。 これは、

産された貢磁を一時収蔵しておく倉庫のようなものがあり、その一部が何かのきっかけで穴蔵に移されたというようなことがあったのかもしれ の威厳を高めるためにふさわしいものであったと考えられないだろうか。さらに推測を広げることが許されるならば、当時、 と想像するからである。また、唐代のいささか「古めかしい」文様構成が、一般的な好尚であったと考えるよりも、その「古めかしさ」 性はあると考える。元以後ほど厳重ではないにせよ、文様構成などについての規範が一旦でき上ったならば、その規範はある程度制約となった それでは、 (a)劃花龍文盤など法興寺遺跡で出土した予の龍文器ならびにその類品も、 総てか一部が貢磁であったのだろうか。筆者はその可能 法興寺遺跡には生

威厳の有無と、「龍」の文様構成がかなり限られているのに、「螭」ははるかに自由に他の意匠と組合されて用いられることから、氏の説は正鵠 を得ていると思われる。 の権威を象徴するものではなく、装飾意匠として自由に用いられたと述べておられる。「螭」を「龍」と比較すれば明白に理解されるであろう(゚ロ゚) それでは、「尚食局」などの銘をもたない「螭」が施された器は貢磁としては用いられなかったのであろうか。ウィルギン氏は、「螭」は皇帝

ができる。その点では、宋金代の定窯の「龍」・「螭」文器は越州窯を継承し発展させたのである。龍と皇帝の権威の結び付きは、次の元代の景 唐代において瑞獣の最高位にあった龍が皇帝の権威を象徴するようになったのは、 陶磁史においては五代の越州窯青磁にその嚆矢を見ること

徳鎮窯においてさらに確固たるものになっていく。

近世に施文陶磁を生産した窯の中で、定窯が担っていた役割の大きさを、定窯の龍文器は我々に教えてくれるのである。

- 1 小山富士夫「定窯々址の発見について」(『陶磁』十三巻二号、昭和十六年)
- 3 2 近年、中国陶磁研究会の関口廣次氏らによって、小山氏が日本に持ち帰られた定窯窯址出土陶片の詳しい調査が行われた(『定窯白磁』、根津美術館、 昭和
- 中国で「萱草文」と呼ばれるものを含む。
- $\frac{1}{4}$ 拙稿「定窯白磁の深鉢について」(『大阪市立博物館研究紀要』、大阪市立博物館、 昭和五五年)
- 5 妙濟浩・薛増福「河北曲陽北鎮発現定審瓷器」(『文物』一九八四年第五期)
- 6 原文では「刻花龍紋大盤」である。
- 7 原文では「刻花龍紋缸」である。
- 8 原文では「印花雲龍紋大盤」である。
- 9 原文では「印花雲龍紋大碗」である。
- $\widehat{10}$ 我国で言う「玉縁」も「唇口」に含まれるが、同意語とも言いきれないので「唇口」のまま用いることにする。
- $\widehat{\mathfrak{i}}$ 前掲『定窯白磁』図版一二七
- Hin-Cheung Lovell "Illustrated Catalogue of Ting Yao and Related Wares in the Percival David Foundation of Chinese Art", University of

- 13) 『宋瓷名品圖録 定窯・定窯型』(学習研究社、昭和四八年)図四七
- 14) 『東洋陶磁9』(講談社、昭和五六年)図一一三
- (1) 馮先銘「瓷器浅説(続)」(『文物』一九五七年第七期) 図五
- 16 九八二年に出光美術館で開催された『近年発見の窯址出土中国陶磁展』に出品された。同展図録資料番号三三〇
- (18) 『中国陶瓷史』(文物出版社、一九八二年)二三四頁(17) 『定窯』(上海人民美術出版社・美乃美、一九八一年)一六二頁
- 20 19 Jan Wirgin "Sung Ceramic Designs", Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities No. 42, 1970, Pl. 77 前掲『定窯』図版六九他

()の流文雲帯が他の盤のものと異なるが、実測図を作成したときに省略した可能性もある。

(22) 前掲『定窯』二三四頁

21

- (24) 前掲『定窯』一六二頁(23) 原文では「早期」である。
- (25) 前掲『定窯』一六二頁
- (26) 前掲「瓷器浅説(続)」
- (27) 河北省文化局文物工作隊「河北曲陽県澗磁村定窯遺址調査与試掘」(『考古』一九六五年第八期)
- 28 『金史』巻五十六に「尚食局提點、正五品。使、 従五品。副使、従六品。掌聰知御膳、進食先嘗、兼管従官食」とある。
- (2) 前掲 "Sung Ceramic Designs" p. 186~p. 187
- (3) 前掲 "Sung Ceramic Designs" Pl. 58a
- (31) 一九七〇年に 北京豊台鎮の 王沢墓 (遼重熙二二年 《西暦一〇五三年》葬) 一九七二年第三期)。 から出土した香炉とほぼ 同形である(「近年来北京発現的幾座遼墓」、『考古』
- (32) 定県博物館「河北定県発現両座宋代塔基」(『文物』一九七二年第八期)
- (31) 佐藤雅彦「宋の白磁」(『世界陶磁全集12』、小学館、昭和五二年)(33) 前掲『文物』一九七二年第八期図版陸1と前掲『定窯』国版五〇
- (35) 前掲図録資料番号三二九
- (36) 関口廣次「小山富士夫先生採集の定窯窯址陶磁片について」(前掲『定窯白磁』図録九二頁)
- 3) 前掲『定窯白磁』図版番号五-六、八-六、九-九、十-四、十一-四
-) 前掲『定窯白磁』図版番号五一六

- 前掲『定窯白磁』図版番号九四―四
- $\widehat{40}$ 前掲『定窯白磁』図版番号九四―五
- $\widehat{41}$ 前掲『近年発見の窯址出土中国陶磁展』図録資料番号三二八
- 前掲「河北曲陽県澗磁村定窯遺址調査与試掘」図二―二一
- $\overbrace{43}$ $\widehat{42}$ 古代は角の無いものを指した(天津市芸術博物館尤仁徳『戦国漢代玉雕紋的造型与紋飾研究』《『文物』一九八六年第九期》)
- $\widehat{44}$ 前掲 "Sung Caramic Designs" p.138~p.140
- 45 前掲『宋瓷名品圖録 定窯・定窯型』図版六〇
- $\overbrace{47}$ $\overbrace{46}$ 前掲『宋瓷名品圖録 定窯・定窯型』図版四五
- 前掲『宋瓷名品圖録 定窯・定窯型』図版四四
- 前掲"Sung Ceramic Designs"によれば、米国のバーネット・コレクションにこの例があるそうである (p.139)
- 前掲 "Sung Ceramic Designs" Pl. 70b
- 前掲 "Sung Ceramic Designs" Pl. 70a
- 54 53 52 51 50 49 48 Margaret Medley "Illustrated Catalogue of Ting and Allied Wares" Pl. VI 34 (No. 116)
 - 前掲『宋瓷名品圖録 定窯・定窯型』図版二三

 - 前掲『宋慦名品圖録 定窯・定窯型』図版二八
- 前掲『東洋陶磁9』図一二〇
- 55 前掲『宋瓷名品圖録 定窯・定窯型』図版五四
- 66前掲『定窯白磁』図版番号一二八
- 前掲 "Sung Ceramic Designs" Pl. 87b
- 58 57 前掲『宋瓷名品圖録 前掲『宋瓷名品圖録 定窯・定窯型。図版六一 定窯・定窯型』図版五六
- $60 \ 59$ 前掲 "Sung Ceramic Designs" Pl. 92a
- $\widehat{61}$ 前掲 Hin-Cheung Lovell "Illustrated Catalogue of Ting Yao and Related Wares in the Percival David Foundation of Chinese Art"
- $\stackrel{\bigcirc}{62}$ 二本の角をもつ。
- 63 前掲 "Sung Ceramic Designs" Pl. 87a
- 前揭「河北曲陽県澗磁村定窯遺址調査与試掘」図十—九
- 前掲『近年発見の窯址出土中国陶磁展』図録資料番号三三一

- 66 前掲 "Sung Ceramic Designs" p, 187
- 中野徹「中国の文様」その由来と流れ」(『展開写真による中国の文様』、平凡社、 一九八五年)一八〇~一八四頁
- 矢部良明「宋元の龍文様と元磁」(MUSEUM」第二四二号、東京国立博物館、一九七一年)
- 69 白磁蟠龍博山炉(大和文華館蔵)
- 白磁龍耳瓶(根津美術館蔵)
- 『東洋陶磁12』(講談社、昭和五七年)図七
- 72 例 『越窯』(上海人民美術出版社・美乃美、一九八一年) 図一七三
- $\widehat{73}$ 前掲「宋元の龍文様と元磁」
- 74 前掲『越窯』図一七〇
- 75 陝西省考古研究所『陝西銅川耀州貉』(科学出版社、一九六五年)図版拾伍 四四
- 76 馮先銘「略談北方青瓷」(『故宮博物院院刊』一九五八年第一期)
- 77 『纙州窯』(上海人民美術出版社・美乃美、一九八五年)図三八

前掲『展開写真による中国の文様』図五

79 前掲『世界陶磁全集12』図版二三〇 78

- 80 前掲 "Sung Ceramic Designs" Pl. 12e
- 81 前掲 "Sung Ceramic Designs" Pl. 12k
- 『中國陶枕』(大阪市立東洋陶磁美術館、昭和五九年)一二五図
- 83 82 広東省博物館『潮州筆架山宋代窰址発掘報告』(文物出版社、一九八一年)図九
- 84 前掲『世界陶磁全集12』図版一四八

85

- 「青磁蟠龍壺」(松岡美術館蔵)(『松岡美術館収蔵中国陶磁名品展』(日本経済新聞大阪本社、一九八三年)図三一)
- 86 前掲『近年発見の窯址出土中国陶磁展』図録資料番号一七・・一七二
- 前掲 "Sung Ceramic Designs" p. 186

本稿に挙げた資料の他、北京故宮博物院所蔵の「定窯白磁劃花螭龍文瓶」など注目すべき龍文の資料があるが、細部を確認し得てないのでとりあげていない。 馮先銘・李輝柄の両氏にお目にかかる機会があり、 法興寺遺跡には近年まで寺院があったことをご教示いただいた。

(図版出典)

図1~4 前掲「河北曲陽北鎮発現定窰瓷器」

前掲『定窯』

図 6 5 五省出土重要文物展覧籌備委員会『五省出土重要文物展覧図録』(文物出版社、一九五八年)

本稿は、昭和六一年二月に美術史学会西部会例会でおこなった口頭発表『定窯白磁の装飾について』の一部を改めてまとめたものである。